

# 講演要旨

## 仏教徒のイスラーム観：インド・タイ・日本

神戸市外国語大学・マギル大学客員研究員  
小布施 祈恵子

本講演では仏教徒のイスラーム観を、中世インド、現代タイ、近現代日本という異なる文脈から、それぞれの社会・政治的状況に照らして論じます。前半ではまず中世インド亜大陸のムスリム支配下における仏教徒の扱いについて説明し、続いてこの時期の仏教徒のイスラーム観の一例として西暦十一世紀頃に成立した『時輪タントラ』の内容を紹介します。続いて現在も仏教史の書籍等に見られるインド仏教がムスリム軍によって滅ぼされたとする説のベースになっている大英帝国の植民地研究の問題点に触れ、インド仏教の衰退が複合的要因により漸次的に起こった現象であることを確認します。次にタイにおける仏教徒とムスリムの関係に視点を移し、近年仏教徒の間で反イスラーム感情が高まっている要因を国内外の社会・政治的動向をふまえて考えます。さらに先に検討したインド仏教がムスリム軍に滅ぼされたとする説がタイの仏教徒のイスラーム観に与えている否定的影響、特に仏教がイスラームに脅かされているという認識、について仏教僧侶の見解を中心に分析します。

後半では日本人（仏教徒）のイスラーム観の変遷を論じますが、ここでも前半と同じくイスラームに関するステレオタイプ的な認識の扱いに焦点をあてます。その上で「コーランか剣か」といった西洋由来の偏見がどのような状況下で疑問視または再考されてきたのかを見てゆきます。まず二十世紀前半に相次いで国内で出版された預言者ムハンマドの伝記をとりあげ、ヨーロッパ・キリスト教徒によって強調されているイスラームの好戦性が日本では肯定的に解釈されていることを指摘します。つまりムハンマドが西洋列強の圧力に対抗するアジア人の同胞とみなされ、大きな共感を持って描かれているのです。また1930年代から国家政策の一環として推進されたイスラーム研究においても西洋由来の偏った理解を超越する明らかな意図がみられます。これに対して戦後日本の一般的なイスラーム認識は再び西洋における言説の影響を大きく受け、否定的なイメージが先行しがちですが、イスラームに対する否定的な先入観を克服した経験を語る仏教者もいます。

本講演では最後に、大乘仏教の精神に基づく日本仏教の立場からイスラームについて積極的に発言を行った二人の仏教者の見解を取り上げ、彼らが持っていたイスラームは他宗教に対して不寛容で攻撃的だというイメージがムスリムとの個人的な交流の経験によって覆された興味深い経緯を紹介します。多岐にわたる内容となりますが、仏教徒のイスラーム観、そして、より広く宗教的他者に対する認識というものの流動性を感じていただければ幸いです。

以上